



Title	懷徳堂文庫蔵『萬年先生遺稿』をめぐって
Author(s)	寺門, 日出男
Citation	中国研究集刊. 2003, 32, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60972">https://doi.org/10.18910/60972</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 懷徳堂文庫蔵『萬年先生遺稿』をめぐって

寺門 日出男

### 序

三宅石庵（一六六五—一七三〇）は、懷徳堂の初代学主となった人物であり、懷徳堂学派はもとより、近世日本思想史においても重要な位置を占める存在である。しかし、現存する石庵関係資料は、あまりにも少ない。大阪大学懷徳堂文庫の図書目録である、『懷徳堂文庫図書目録』（大阪大学文学部編集・発行、昭和五十一年）<sup>〔注1〕</sup>には、石庵の講義の筆記録である『萬年先生論孟首章講義』及び『論語聞書』<sup>〔注2〕</sup>と、『萬年先生習字帖』を見出すのみである。他には、医学関係の著述である『医事傍観』（鈔本・大阪府立図書館蔵）、吉田鋭雄が蒐集した「石庵先生遺稿」（『懷徳』十八号所収・昭和十五年十月・懷徳堂堂友会刊）、櫻井武次郎の論考「俳人泉石としての三宅石庵」（『懷徳』四十一号所収・昭和四十五年十月）に、石

庵の句が集められている程度である。したがって、その学問・為人を直接知り得るような資料は、ほとんど残っていないと言つてよい。

大阪大学中国哲学研究室を中心に結成された懷徳堂研究会では、大阪大学懷徳堂文庫資料の実見調査を行つてきた。調査の過程で、『懷徳堂文庫図書目録』に載っていない、石庵の詩文集二種の存在が確認された。

本稿は、これらの資料を中心として、懷徳堂研究における石庵の位置付けを再検討することを目的としている。

### 一

今回の新出資料は、ひとまず外題で掲げれば、以下の二点である。

①『萬年先生遺稿』二卷一冊 鈔本

「昭和29.12.22受入」、「大阪大學圖書之印」の印<sup>〔注3〕</sup>

があり、『懷徳堂文庫図書目録』作成の時点で既にあったはずで、当然掲載されている筈のものであるが、なぜか漏れており、従って一般にはその存在が知られていなかった。ただし、前掲吉田鋭雄「石庵先生遺稿」には、復刻紹介されている。吉田は「石庵先生遺稿に就いて」と題する序文で、「偶昨年春、中井家より懷徳堂並水哉館遺書遺品を寄進せられた其の内に、同先生の詩文雜稿若干を獲た」と述べていることから、この資料は昭和十四年、中井天生から重建懷徳堂に寄贈されたものである。

『中庸定本』（中庸錯簡説に関わる、十五・十六・二十三・二十四・二十五章のみを掲げる）、詩十九首、「算法示蒙」と題する全文八十字のものから成る。詩篇の前には表紙がついている。左側に行書体で「萬年先生詩稿」とあり、竹山の手と思われる。表紙中央には草書体で「万年詩稿ノ部 五」と、墨筆で書かれている。左側の行書体とは明らかに異筆で、石庵を「先生」と呼んでいないことから、息子の春楼もしくは懷徳堂外部の者が書いたものであるう。「五」は巻数を指すと思われるが、元の四の字を抹消し、その右隣に書き加えられている。この字が書き加えられた時点では、少なくとも五巻以上の詩稿が存在していたと考えられる。さらに、「詩稿ノ部」という語から考えて、詩以外の著述も存在していたのではないかと

推定される。

巻頭には竹山撰「萬年先生遺稿序」が付けられている。この序文には、例えば「愚」↓「予」のように、竹山が朱筆で推敲した跡があること、また、竹山が序文を撰したもののには、刊本・定稿本いずれも撰された年月等が明示されているのに対し、この序文にはそれが無いことから、未定稿本であると考えられる。おそらく、竹山は石庵の著述を蒐集・公刊するつもりで準備を進めていたが、何等かの事情によって果たせなかったものと思われる。

同序文が著された時期は示されていないが、序文の中に「（五井蘭洲の）質疑の篇、予嘗て之に序を為り」という一節があり、また、序文末尾の署名は「助教中井積善」（傍点筆者）とある。したがって、同序は『質疑篇』の序文が著された明和三年（一七六六）から、竹山が学主となった天明二年（一七八二）の間に作成されたものであることは、間違いないだろう。

「序文」を含め、全篇が竹山の筆によるもの（上述「万年詩稿ノ部」という記述を除く）であることから、資料としての信頼度は高い。

## ②『觀瀾先生詩稿』一卷一冊 鈔本

新田和子（中井天生の妹終子の養女）から、昭和五十

四・五十八年の二回にわたって寄贈された、新田文庫中の資料である。この文庫の資料群は、中井家伝来のものということで貴重資料が多数含まれているが、寄贈の際に書きつけられたと思われる外題には、その内容と合致しないものが散見する。

詩二十首と「雜記」と題する漢字片仮名混じりの全二十五字の短文と、巻末の「萬年生日正月十九日 所生処三條通 御幸町上ル丁」という記述から成る。外題に従うならば、②は石庵の弟・三宅觀瀾の詩集ということになる。だが、②の詩の内十八首が、若干の文字の異同はあるものの、①所収のものと重複している。その中には、「中井誠之（整庵）前日播磨州に之きて未だ帰らず」という題の詩があり、作者が中井整庵と親しかつたと考えられること、「難波客居」と題する詩があることから、故郷を離れて大坂に住んだ経験があると考えられること等から、これらは石庵の作であること、ほぼ間違いない。

「觀瀾」と誤った理由は、同書に内題が無かつたことと、②のみに採られている詩に「兄を夢む」と題する詩があり、題の下に小字で「觀瀾先生」と注記があつたことに因ると思われる。因みに『觀瀾集』<sup>注4</sup>には、「兄を夢む」詩は採られているが、①・②に共通する十八首は載っていない。おそらく、同詩は②を筆写した人物、もしくは②

の元となつた鈔本を作成した人物が、石庵に關係の深い作品と考えて入れたのであろう。

## 二

西村天因『懷德堂考』は、懷德堂学派研究の最も基本的な文献であるが、石庵については「著述を好まず」（上巻三十二頁）、「詩文に長ぜず」（同）と述べており、漢文による著述は得手ではなく、むしろ、「俳諧を善く」（同）する人物であつたとしている。しかし、前掲櫻井武次郎「俳人泉石としての三宅石庵」に拠れば、石庵の作句活動が見られるのは、ほとんど元禄末年に限られていることである。そして、櫻井は次のように述べている。

一体、彼は句作に対しては余り熱心ではなく、交際の上から、当然入集してよかりそうな讃岐や大坂の俳書に、彼の名の見えぬことは屢々であつた。「もとは俳かい士じゃげな」と、石庵について述べる秋成の言（『胆大小心録』）は、当然、肯んじられず、「泉石（筆者注：石庵の俳号）は何がしの鴻儒、俳句をも玩ばれて此戯れ有しとぞ」という『続今宮草』が最も真に近い。

これに拠れば、石庵が「俳諧を善く」していたという説

は、当を得たものではない。

また、『萬年先生遺稿』(注5)を見る限り、「詩文に長ぜず」という評価についても、疑問が残る。現存する石庵の漢詩文は、吉田銳雄が蒐集したものを含めても僅かである。しかし、それらの作品の傾向を見ると、実際には相当多数の詩作をしていたであろうことが、推定できるからである。例えば「会飲五友軒和笠字」と題する詩は、おそらく儒者同士が会合の席で作った、和韻詩の類であろう。「題画」と題する二首は、同好の士が描いた画に、乞われてつけた画賛の類であろう。「浪華津口留別諸友」は、旅に出かける石庵が、見送りにきた友人達に贈った詩である。当然、見送る側も送別の詩を贈ったはずである。

石庵と時代の重なる儒者達の詩文集には、管見の及ぶ限りでは、例外なくこうした交流の場で作られた詩が、多数載せられている。そもそも当時、このような場で詩を作れないようでは、儒者としてすら認知されなかったはずで、おそらく石庵も折に触れて詩作をしていたに違いない。

言うまでもないことだが、現存の『萬年先生遺稿』は、石庵が作った詩の、氷山の一角に過ぎない。先に触れたように、ある時点までは、現存の五倍以上の詩が伝えら

れていたはずである。享保九年の大火によって、石庵の原稿類が焼失したことはよく知られているが、石庵は享保十五年に六十六才で亡くなっているので、晩年に到って、それまでに書きためた詩文・稿本類を失ったと見るべきであり、現在残されているものだけから、判断すべきではない。

こうした、いわば公的な場での詩よりも、より多く残っているのが、おそらく強制されたものではない、私的な詩である。例えば、「贅庵前日之播摩州未帰」と題する詩は、門下生・中井贅庵が郷里・龍野に出かけていて、その帰りを待ち侘びる心情を詠じたもの。また、「夏日喜雨」詩は、熱暑続きのところに降った慈雨を喜ぶものである。このように日常の所感を表現したものは、詩文が得意でない人物が、進んで作するような性格のものではない。

これらの私的な詩の中でも、石庵の思想を探る上で、看過できない、次の詩がある。

浪華客居	浪華の客居
乾坤孤病客	乾坤 孤病の客
無處不僑居	処るところ無く僑居もせず
劇地風流少	劇地 風流少なく
新徙朋友稀	新たに徙れば朋友稀なり

門前留海舶

門前に海舶を留め

月下讀鄉書

月下に郷書を読む

時復江河曲

時に江河の曲に復り

躊躇獨羨魚

躊躇して独り魚を羨む

右は、石庵が讃岐から大坂に出てきた時の作と考えられるものである。詩の前半では、住み慣れた讃岐の地を離れた、石庵の孤独な心境が詠じられている。「劇地」は、繁華で重要な土地のこと、ここでは大坂を指す。六句目の「郷書」は家書に同じで、家族からの手紙。ここでは弟・観瀾からの手紙を指すものと思われる。最終句の「羨魚」は、孟浩然「臨洞庭上張丞相」詩の「徒に魚を羨む情有り」を踏まえた表現で、仕官を望む心情を譬えたものである。石庵が大坂にやってきたのは、元禄十四年（一七〇一）<sup>（注五）</sup>。これに先立ち、観瀾は徳川光圀に仕え、元禄十年から『大日本史』編纂事業に携わっている。手紙には恐らく、多忙ながらも充実した生活の様子等が書かれていたのではなからうか。月明かりの下でその手紙を読み、自分も仕官して、活躍してみたいという「志」を詠じた作品であろう。石庵は、懷徳堂官許の際、学主となることを一時は辞退したこともあって、「隠者」・「市隱」と評されてきた。しかし、この詩を見る限り、自己

の学識を活かすため、仕官を考えていた時期もあったようである。

さらに、詩型の面から見ても、五言詩・七言詩の他に、六言詩・三言詩といった、他にあまり見かけないものもあり、漢詩による表現を積極的に追究しようとする、石庵の姿勢を窺うことができる。

### 三

『萬年先生遺稿』の中でも、石庵の伝記資料としてとりわけ注目されるのが、竹山撰の序文である。以下、序文の中で石庵の事跡に関する部分を追ってみる。竹山から見て、石庵の学問は「平昔の独見、超詣せり。先賢未発の旨を得ること、固より枚挙す可から」ざるものがあったとある。既述のように、書かれた時期が春楼存命中のことなので、多少の誇張は有るのかもしれないが、儒学者としての見識の高さが窺える。しかし、その学問上の成果を「稍々（次第に）親ら録」したものは、不幸にも「府下甲辰の災（享保九年の大火）」によって、灰燼に帰してしまふ。しかし、「令嗣春楼君、旁羅搜索すること数十年、寸菟尺輯、始めて巻を成す」ことができた。そして、そこに残された成果の中でも特筆に値するのは、

「中庸錯簡の説」と「五行配当の非を斥け、因りて四徳に信を加へて五常と為すの誤りを正す」説の二つであり、これによつて「学ぶ者始めて思ふ孟の真を知る」ことができたという。

右の内、所謂中庸錯簡説については、石庵の学説として広く知られてきた。西村天因『懷徳堂考』（石庵の学問著述）項でも、「石庵の創見、後世に朽ちざる者一あり」（三十一頁）とあり、石庵の業績として中庸錯簡説を採り上げてゐる。だが、この五常に関する説について、天因はこの項では全く触れていない。おそらく、天因は竹山の《萬年先生遺稿序》を見ていなかったであろう。

さて、石庵の五常説は、五井蘭洲によつて継承されたようである。蘭洲の『質疑篇』には、五常説が載せられている。竹山に拠れば、「（蘭洲）の説、先生の旨と吻合して間無」いものであるというのである。そして、それは、「蓋し、蘭洲の学、家承に出づと雖も、夙齡より、（石庵）先生門徒の間に厠<sup>まじは</sup>れば、則ち五行の説の如き、固より已に其の緒論を与聞<sup>まじは</sup>したことに因るのである。

では、蘭洲の五常説は、どのようなものであるうか。『質疑篇』（注）の巻頭に、その論文は掲載されている。少々長いが、以下に全文を掲載する。

《泰誓》曰、「商王受狎侮五常。」孔安国曰、「怙侮五常之教。」《舜典》、「慎徽五典。」孔曰、「五典、五常之教。父義・母慈・兄友・弟恭・子孝。」又曰、「五品不遜。」孔曰、「五品謂五常。」又曰、「敷五教在寛。」孔曰、「布五常之教。」《武成》曰、「重民五教。」《左氏伝》載季文子曰、「舜臣堯、八元八愷、使布五教于四方、父義・母慈・兄友・弟恭・子孝。」《孟子》曰、「使契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。」司馬遷叙《舜本紀》、亦拠《左伝》爲五教之目。左氏多誕妄不可拠信。唯孟子伝道尤醇、去聖又邇。当以父子・君臣・夫婦・兄弟・朋友、爲五品、親・義・別・叙・信、爲五常也。董仲舒曰、「仁・誼・礼・智・信、五常之道、王者所当修飾也。」班孟堅亦言、「五常者何。謂仁・義・礼・智・信也。」董子泥五行、乃遂附会立此目耳。非古義也。《閔尹子》有仁・義・礼・智・信之目、然此書係偽撰、亦弗可從。（表記を常用漢字で統一し、適宜記号を補つた。）

大意をあげれば、蘭洲は『尚書』における用例と孔安国の注釈を引き、五常＝五教であるとする。さらに、『孟子』を引用して、親・義・別・叙・信が五常であるとする。そして、一般に言われる仁・義・礼・智・信は、董仲舒が五行説

に拠つて作爲したものであつて、「古義」ではないと論じている。今日から見て、『尚書』の文献学上の問題はあるものの、論ずるところは合理的である。蘭洲の代表的著述『非物篇』に見られる方法論と、基本的に一致するものだろう。

では、石庵の五常説が、果たしてどの程度蘭洲のものと似ているのだろうか。現物がな以上、断定はできないが、石庵の説によつて子思・孟子の真を知ることができるようになったという竹山の説明と、蘭洲の「古義」を明らかにしようとする姿勢は、ほとんど同じと言つていいだろう。

#### 四

従来の懷徳堂学派研究では、西村天囚『懷徳堂考（上巻）』（明治四十三年三月刊）の記述が後世の研究に多大な影響を及ぼしてきた。天囚が懷徳堂についての調査研究を行った時期が、懷徳堂廃絶からそれほど時間が経過して居らず、現在我々が目に出来ない資料や、懷徳堂に学んだ人々に対して直接聞き取り調査が可能であつたこと等に因り、その記述内容に抗し難い雰囲気があつたことは、否定できない。

しかし、『懷徳堂考』における石庵の評価は、以下に掲げる通り、実は曖昧模糊としたものである。すなわち、弟の観瀾が文章に巧みであつたのに対して、「石庵は道德を以て勝」（上巻十三頁）る人物であり、「俳諧を善くし」（同）、「鼓を善くし、又謡曲を好」（同三十三頁）む「才子風の人」（同）としてゐる。一方で、その弁舌は「音吐朗暢ならずして、口中糊塗」（同二十四頁）とあるように、全く冴えなかつたため、「経書の講説は、其の所長に非ず」（同三十一頁）、「彼は実に市隱なり。世其の榮利を好まざりしを称す。此の比ひの事とて、禄を求めんこと難からざりけんに、就くをいさ屑しとせずして大阪に隱遁せし」（同三十二頁）人物であつたと評されている。つまり、石庵は道德家でありながら才子でもであり、また一方で口下手な隠者でもあつたということになる。このような支離滅裂な評を綜合して、その人物像を想起することは、ほとんど不可能である。

本稿は、決して天囚の業績・『懷徳堂考』が果たした役割を否定するものではない。だが、天囚が『懷徳堂考』を著した時代でさえも、石庵没後から既に百年以上の隔りがある。右のような矛盾は、石庵の名が揚がつて以降、その言動が誇張されたり、甚だしい場合には捏造されたりして、後世に伝わったこと、更には既に述べたよ



うに、資料的な限界に因るものであろう。

天明二年（一七八二）、春楼が没し、竹山が学主に就任して以降、懷徳堂経営陣から三宅家の影は完全に消えてしまう。この時点でさえ、石庵が没してから既に五十年以上もの歳月が流れている。おそらく石庵の警咳に接した人物は、懷徳堂内にほとんど残っていないかったであろう。竹山の『萬年先生遺稿』が未定稿に終わり、石庵の学問や為人を後世に適切に伝える試みは、その後ついに為されなかったのである。

## 結

従来、石庵と言えば、『論孟首章講義』から窺えるような、庶民にも分かり易い講義をする、啓蒙家としてのイメージが強かったように思われる。しかし、もし石庵がそれだけの人物であり、懷徳堂が庶民教育の場に過ぎなかったならば、昌平饗に次いで官許を得たことも、並河誠所や五井蘭洲のような第一級の儒者が助教となったことも、また、中井甕庵や富永仲基などの人材を輩出したことも、合理的に説明できない。おそらく、高弟を対象に中庸錯簡説や五常説を講義する場が、設けられていたのであろう。竹山が評するように、石庵は、儒者達の尊

崇を得るに足る、高い見識を有した人物であったのだらう。

本稿では、『萬年先生遺稿』を対象とした検討に止まったが、今後は讃岐や京・大坂における交遊関係をも視野に入れて、より綿密な検討をする必要があると考える。この点については、今後の課題としたい。

## 注

- (1) 同目録は、懷徳堂文庫電子図書目録 (<http://kaitokudo.jp/>) と題して、web上で公開されている。
- (2) 大阪大学懷徳堂文庫蔵。同書は全六冊からなる。各冊末尾の識語から、一〜三冊目は五井持軒の、六冊目は三宅石庵の講義を筆録したものであることがわかる。なお、同書の詳細については、『大阪大学大学院文学研究科紀要』第四十二巻—二（平成十四年三月刊）を参照されたい。
- (3) 他に「天生寄進」の印があり、この資料が中井家伝来の資料であることは、間違いない。
- (4) 本稿では、国立国会図書館所蔵の鈔本に拠った。同書には、以下のような注がある。

兄時在江戸、元禄甲戌乙亥兩年之作
- (5) 以下、詩の引用は①の『萬年先生遺稿』に拠る。

(6) 石庵来坂の時期については、元禄十三年説を採用している場合が多いが、本稿では櫻井武次郎の説に従った。

(7) 大阪文淵堂等刊本に拠る。蘭洲の著述は竹山・履軒兄弟の校訂を経て後、刊行されていたようで、本稿引用箇所も、大阪府立中之島図書館所蔵『蘭洲先生遺稿』（鈔本）とでは異同がある。なお、懷徳堂文庫には、竹山・履軒兄弟が『質疑篇』上梓に先立ち、遺稿の推敲について意見交換をした、『質疑疑文』が収蔵されている。『質疑篇』刊行に到る過程を窺うことができる、興味深い資料である。